

アレクサンドリアから東京まで： アート、植民地主義、そして絡み合う歴史

2020年12月3日 [木] – 12月4日 [金]
オンライン配信、YouTube

出演者プロフィール

第1日：12月3日（木）

18:00 – 18:05 [東京] / 9:00 – 9:05 [ロンドン]

オープニング・リマークス

片岡真実

森美術館 館長。国際美術館会議(CIMAM) 会長。2003年から森美術館勤務、2020年より現職。2007-2009年はロンドンのハイワード・ギャラリーにて、インターナショナル・キュレーターを兼務。2012年に第9回光州ビエンナーレ共同芸術監督、2018年に第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督。2022年開催予定の国際芸術祭「あいち2022」芸術監督。

パネル1：ナショナリズムとコスモポリタニズムの間

18:05 – 19:30 [東京] / 9:05 – 10:30 [ロンドン]

モデレーター

デヴィカ・シン

テート・モダン・インターナショナル・アート部門キュレーター。展覧会カタログ、雑誌などに幅広く執筆。以前はケンブリッジ大学のスムッツ・リサーチ・フェロー、パリのドイツ美術史研究センターのフェローを務めた。ケトルズヤード（イギリス、2019-2020年）、ダッカ・アート・サミット（バングラディッシュ、2018年）、デューク大学（米国、2018年）、CSMVS（ムンバイ、2017年）で展覧会を企画した。

発表者

印南美沙子

ダラム大学（英国）現代語学・文化学部准教授、日本語学科ディレクター。身体経験の言語への転換や考えの循環など、触れることや感覚・身体、親密性や媒体を超えた解釈について研究。2012年インターナショナル・フェデレーション・オブ・シアター・リサーチよりニュー・スカラズ・プライズ 第2位を受賞。Bunkamura（東京）、グランドボーン・フェスティバル・オペラ（サセックス、英国）などから委託を受け舞台芸術を制作。触感、スキンシップ、近代日本文学について論じた『Touching the Unreachable』をミシガン大学出版より出版予定。修士号（文学）をニューヨーク大学、博士号をオックスフォード大学にて取得。

ヘレナ・チャプコヴァー

東京と京都を拠点に活動するキュレーター、研究者。立命館大学グローバル教養学部美術史科准教授。プラハとロンドンで国境を越えた視覚文化と日本研究について学ぶ。「Forgotten Japonisme」（2007-2010年）や「Enchanted Modernities: Theosophy, Modernism and the Arts, c.1875-1960」（2013年-2015年）、「Bauhaus Imaginista」（2016-2019年）といった国際的かつ学際的な研究プロジェクトに協力。

サナタナン・タモタランピライ

1969年スリランカ、ジャフナ生まれ。ジャフナ大学美術史シニア・レクチャーラー。デリー大学にて修士号（絵画）、

ジャワハルラル・ネルー大学にて博士号を取得。スリランカ・アーカイブ・フォー・コンテンポラリー・アート・アーキテクチャー・アンド・デザインを共同設立。個展「Mismatches」（サスキア・フェルナンド・ギャラリー、スリランカ、2011年）、個展「Dis/Placement」（サスキア・フェルナンド・ギャラリー、スリランカ、2013年）を開催。「15 invitations」展（アジア・アート・アーカイブ、香港、2016年）、「Insecurities: Tracing Displacement and Shelter」展（ニューヨーク近代美術館、2016-2017年）、ラホール・ビエンナーレ（パキスタン、2017年）、シャルジャ・ビエンナーレ（アラブ首長国連邦、2019年）などにも参加。近年の著書に『Modernity and Visual in Jaffna, 1920-1990』（2018年）、『Stories of Survival/Resistance: Art, Memory and Justice in postwar Sri Lanka』（2018年）がある。

パネル2：冷戦、解放、モダニズム

20:00 - 21:30 [東京] / 11:00 - 12:30 [ロンドン]

モデレーター

クリスチャン・クラヴァグナ

美術史家、キュレーター。ウィーン美術アカデミーのポストコロニアル研究の教授。著書に『Transmoderne. Eine Kunstgeschichte des Kontakts (Transmodern: An Art History of Contact)』（b_books、2017年）、編著に『The Museum as Arena. Artists on Institutional Critique』（ウォルター・ケーニツヒ、2001年）、共編著『Transcultural Modernisms』（Sternberg Press、2013年）。

発表者

タカモリ・ノブオ

日系台湾人キュレーター、台北在住。台北国立芸術大学芸術跨域研究所准教授。国立交通大学にて芸術学の博士号を取得。2019年、国家文化芸術基金会（NCAF）研究員を務める。近年、企画した展覧会に「秘密の南方：美術館のコレクションにおける冷戦の視点からグローバル・サウス」展（台北市立美術館、2020年）、「ある島での暮らしとランドスケープ：ヤシ、バナナ、サトウキビ、ビンロウ」展（台南市美術館、2020年）、「私たちの国が失策したあと」展（台北デジタルアートセンター、2019年）など。

ナディア・ラドワン

ベルン大学（スイス）美術史研究所世界美術史准教授。研究は、中東の美術・建築（19-20世紀）、非西洋的モダニズム、グローバル・ミュージアムに焦点を当てる。『Les modernes d'Egypte (The Moderns of Egypt)』（ピーター・ラング、2017年）と題する博士研究は出版され、現在は中東における隠された可視性と抽象化の政治についての2冊目の本を執筆している。

マリア・ミレーバ

ロンドン大学コートールド美術研究所アソシエイト・レクチャーラー。専門はロシアと旧ソビエト連邦の20・21世紀芸術と視覚文化。主な研究対象は、戦間期における左翼国際主義者とその支持者たちのソビエト実験への関与に関する比較研究、および1945年以降の社会主義的国際主義ネットワークの発展。2011年コートールド美術研究所にて取得した博士号では1920-30年代ソビエト連邦の国際芸術を展示する際の政治学に注目した。現在、ソビエト社会主義リアリズムの実践と旧ソビエト共和国、中東、アジア、アフリカでのその受容に関する研究プロジェクトを進行中。

ゼイガム・アジゾフ

アーティスト、哲学者。1963年アゼルバイジャン共和国生まれ、ロンドン在住。作品は、時間、イメージ、技術の問題、また、移住とメディアの言語と新しい模範に関連したグローバル化の物語的手続きに取り組んでいる。最近では、世界各地で作品を発表。主な展覧会として、ベネチア・ビエンナーレ（アゼルバイジャン館、2019年）、ザ・タイム・サロン（シドニー、2017年）、ベネチア・ビエンナーレ（2011年、2003年）、テート・モダン（ロンドン、2006年）、ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン、ドイツ、2004年）、グラーツ・クンストフェライン（オーストリア、グラーツ、2002年）、TNプローブ（東京、2001年）など。近著に『The Time of the Image. A Philosophical

Exploration of the Image in the work of Bernard Stiegler』(ヘルベルト・フォン・ハレム出版、2020年)。

第2日：12月4日(金)

18:00 - 18:05 [東京] / 9:00 - 9:05 [ロンドン]

オープニング・リマークス

イ・スキョン

テート・モダン・インターナショナル・アート部門シニア・キュレーター、ヒュンダイ・テート・リサーチセンター・トランスナショナル。以前はテート・リサーチセンターを率いていた。アジア太平洋(2012-2015年)とアジア(2016-2018年)を担当し、テート・コレクションのためにアジア太平洋地域の近現代美術の調査・収集を指揮した。近年では、「ナム・ジュン・パイク」展(テート・モダン、2019-2020年)をキュレーションし、コレクション展「A Year in Art: Australia 1992」(テート・モダン、2021-2022年予定)を共同キュレーションする。

パネル3：ポストコロニアルの多様性

18:05 - 19:30 [東京] / 9:05 - 10:30 [ロンドン]

モデレーター

林 道郎

上智大学国際教養学部教授、美術史・美術批評。主な著書に『静かに狂う眼差し』(水声社、2017年)、『絵画は二度死ぬ、あるいは死なない』(全7冊)(ART TRACE、2003-2009年)など。共編書に『From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989』(ニューヨーク近代美術館、2012年)など。

発表者

ホー・ツーニエン

歴史的・哲学的なテキストやアーティファクトに関連した映画、ビデオ・アート、演劇を制作している。最近の作品は、現在進行中のメタ・プロジェクト「東南アジアの批評辞典(The Critical Dictionary of Southeast)」(2012年-)のもと、weretiger(《One or Several Tigers》、2017年)やthe triple agent(《The Nameless》、2015年)のような変成的な人物が登場する。

山本浩貴

文化研究者、アーティスト。1986年千葉県生まれ。一橋大学社会学部卒。ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アーツにて修士号と博士号を取得。2013年、ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究センター博士研究員。韓国のアジア・カルチャーセンター研究員、香港理工大学ポストドクトラル・フェローを経て2020年1月より東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科助教。京都芸術大学美術工芸学科非常勤講師。著書に『現代美術史 欧米、日本、トランスナショナル』(中央公論新社、2019年)。

馬 定延

1980年韓国ソウル生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科修了(博士・映像メディア学)。著書『日本メディアアート史』(アルテスパブリッシング、2014年)、共訳書『Paik-Abe Correspondence』(Nam June Paik Art Center、2018年)、論文「光と音を放つ展示空間-現代美術と映像メディア」(『スクリーン・スタディーズ』、東京大学出版会、2019年)、共編著書『SEIKO MIKAMI: 三上晴子-記録と記憶』(NTT出版、2019年)など。現在、明治大学国際日本学部特任講師、多摩美術大学研究員、韓国『月刊美術』東京通信員。

小田原のどか

1985年宮城県仙台市生まれ、東京在住。美術家、評論家。長崎の原爆碑の変遷や公共空間の女性裸体像などについての学術研究と作品制作、評論執筆を並行しておこなう。くわえて出版社の代表をつとめ、彫刻についての論考集や叢書の刊行を手掛けている。

パネル4：新植民地主義に反して

20:00 – 21:30 [東京] / 11:00 – 12:30 [ロンドン]

モデレーター

ミン・ティアンポ

カールトン大学美術史教授、トランスナショナル文化分析センターの共同ディレクター。国際化を理解し、再構成するための新しい構造を提供するトランスカルチュラル・モデルに関心を持っている。著書に『Gutai: Decentering Modernism』（シカゴ大学出版局、2011年）。「具体：素晴らしい遊び場」（グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、2013年）の共同キュレーターを務める。

発表者

パメラ・コーリー

国際的な文脈と国境を越えた広い範囲での東南アジアに焦点を当て、近現代美術史を研究する。カリフォルニア大学アーバイン校で学士号（スタジオ・アート）、コーネル大学で博士号（美術史・視覚学）を取得。現在は、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院で教鞭をとる。著書に『The City in Time: Contemporary Art and Urban Form in Vietnam and Cambodia』（ワシントン大学出版局、2021年）。また、ウェニー・テオと、Oxford Art Journalの特集号『Voice as Form』（2020年）のゲスト共同編集者を務めている。

アナ・ビルバオ

ヨーク大学近現代美術講師。研究対象は視覚文化、展覧会制作と美術機関の歴史、東南アジアとラテンアメリカを主にしたグローバル・サウスにおける現代美術といった視点から見た資源収奪主義(extractivism)。Afterall Journal 編集者、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズのアフターオール・リサーチ研究員、エセックス大学のティーチングフェローを経て現職。2017年、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学美術史学部客員研究員。

ウェニー・テオ

美術史家。ロンドン大学コートールド美術研究所アジア近現代美術および視覚文化講師。1978年から2008年までの中国現代美術とスペクタクルのアンビバレントな関係を検証した論文で、ロンドン大学で美術史の博士号を取得。研究テーマは、アート、地政学、労働、テクノロジー、デジタル文化、エコロジー、中国語文化におけるジェンダー。現在は、2008年から2018年までの中国現代美術に焦点を当てた書籍と、シンガポール生まれのイギリス人彫刻家・版画家キム・リム(1936-1997年)のモノグラフに取り組んでいる。コートールド美術研究所の着任前は、上海現代美術館とテート・モダンに勤務し、その後もさまざまなインディペンデントなキュレーション・プロジェクトに携わってきた。Journal of Contemporary Chinese ArtやOxford Art Journalの編集委員を務めるほか、多数の雑誌や展覧会カタログ、美術雑誌などで執筆活動を行っている。

フィオナ・アムンゼン

アーティスト、ライター。アジア太平洋地域、アメリカ、ヨーロッパで幅広く展覧会を開催する。オークランド工科大学スクール・オブ・アート・アンド・デザインでシニア・レクチャーを務め、アジア太平洋戦争（第二次世界大戦）に関連した物語や経験を追悼する代替的な様式を探求し、モナッシュ大学で博士号を取得した。この研究から生まれた展覧会「Body that Lives」（St Paul St Gallery、ニュージーランド、オークランド、2018年）は、2020年のアオテアロア・ニュージーランドで最も権威のあるアート賞「ウォルターズ賞」にノミネートされている。2019年にはフルブライト・ニュージーランド奨学生賞を受賞し、冷戦下の軍事核技術、軍事資本主義、核環境破壊、その精神性の関係を探る写真・映像・文章プロジェクト「Coming back to Life」（2019年-）の初期調査を開始した。

From Alexandria to Tokyo: Art, Colonialism and Entangled Histories?

2020.12.3 [Thu] - 12.4 [Fri]

Online event, YouTube

Biographies

DAY 1: Thursday, December 3, 2020

18:00 - 18:05 (Tokyo) / 9:00 - 9:05 (London)

Opening Remarks

Kataoka Mami

Kataoka Mami is Director of the Mori Art Museum and President of International Committee for Museums and Collections of Modern Art (CIMAM). She has been working at the Mori Art Museum since 2003 and has been appointed as Director in 2020. She was also the International Curator at the Hayward Gallery, London in 2007-2009, Co-artistic Director of the Gwangju Biennale in 2012, Artistic Director of the 21st Biennale of Sydney in 2018, and recently appointed as Artistic Director of the Aichi Triennale 2022.

Panel 1: Between Nationalism and Cosmopolitanism

18:05 - 19:30 (Tokyo) / 9:05 - 10:30 (London)

Moderator:

Devika Singh

Devika Singh is Curator, International Art at Tate Modern. Her writing has appeared widely in exhibition catalogues, magazines and journals. Singh was previously Smuts Research Fellow at the University of Cambridge and a fellow at the Centre allemand d'histoire de l'art, Paris. She curated exhibitions at Kettle's Yard (2019-2020), the Dhaka Art Summit (2018), Duke University (2018) and the CSMVS, Mumbai (2017).

Speakers:

Fusako Innami

Fusako Innami is Assistant Professor in Japanese and Performance Studies at the School of Modern Languages and Cultures, Durham University, UK. Her research interests include the body and the senses, intimacy, and inter-media translation, including the translation of bodily experiences into language and the circulation of ideas. She is a recipient of the 2012 New Scholars' Prize (second place) from the International Federation for Theatre Research, and her commissioned works in performing arts for organizations include those at Bunkamura in Tokyo and Glyndebourne Opera in Sussex, UK. Her monograph on touch, skinship, and modern Japanese writing titled *Touching the Unreachable* is contracted with the University of Michigan Press. She received her MA from New York University and a DPhil from the University of Oxford.

Helena Čapková

Helena Čapková is a Tokyo/Kyoto-based curator, researcher, and an art history professor at Ritsumeikan University, Kyoto. She studied transnational visual culture and Japanese studies in Prague and London. Already as a PhD candidate, she collaborated on international and interdisciplinary research projects such as *Forgotten Japonisme* (2007-2010) and later *Enchanted Modernities: Theosophy, Modernism and the Arts, c.1875-1960* (2013-2015) and *Bauhaus Imaginista* (2016-2019).

Sanathanan Thamothersampillai

Born in Jaffna, Sri Lanka, in 1969, Sanathanan Thamothersampillai is currently Senior Lecturer in the Art History Department at the University of Jaffna. Having obtained his MFA in Painting from the University of Delhi and PhD from Jawaharlal Nehru University, he co-founded the Sri Lankan Archive for Contemporary Art, Architecture and

Design. He held various solo exhibitions such as *Dis/Placement*, Saskia Fernando Gallery (Sri Lanka, 2013), and *Mismatches*, Saskia Fernando Gallery (2011), and his works have been widely exhibited alongside others, including Sharjah Art Biennale (UAE, 2019), Lahore Art Biennale, (Pakistan, 2017), *Insecurities: Tracing Displacement and Shelter*, Museum of Modern Art, New York (2016-2017), and *15 Invitations*, Asian Art Archive, (Hong Kong, 2016). *Modernity and Visual in Jaffna, 1920-1990* and *Stories of Survival/Resistance: Art, Memory and Justice in Postwar Sri Lanka* (both in 2018) are the most recent among his numerous publications.

Panel 2: The Cold War, Liberation, and Modernism

20:00 - 21:30 (Tokyo) / 11:00 - 12:30 (London)

Moderator:

Christian Kravagna

Christian Kravagna is an art historian and curator. He is Professor of Postcolonial Studies at the Academy of Fine Arts in Vienna. He published *Transmoderne: Eine Kunstgeschichte des Kontakts* (Transmodern: An Art History of Contact) (b_books, 2017), edited the *The Museum as Arena: Artists on Institutional Critique* (Walther König, 2001), and co-edited *Transcultural Modernisms* (Sternberg Press, 2013).

Speakers:

Nobuo Takamori

Taiwanese curator of Japanese descent currently based in Taipei, Taiwan. He is Assistant Professor at the Graduate Institute of Trans-Disciplinary Arts, National Taipei University of Arts. In 2019, he served as Researcher at the Taiwan International Arts Network, National Culture & Arts Foundation. He received his PhD in Art Studies from the National Chiao Tung University. His recent curatorial projects include *The Secret South: from Cold War Perspective to Global South in Museum Collection*, Taipei Fine Arts Museum, (Taiwan, 2020); *Everyday Life and Landscapes of the Island: Betel Nuts, Bananas, Sugar Cane, and Palms*, Tainan Art Museum (Taiwan, 2020); and *After Our Dear Country Failed*, Taipei Digital Art Center (Taiwan, 2019).

Nadia Radwan

Nadia Radwan is Assistant Professor of World Art History at the University of Bern, Switzerland. Her research focuses on Middle Eastern art and architecture (19th-20th century), non-western modernisms and the global museum. Her PhD entitled *Les modernes d’Egypte* (The Moderns of Egypt) (Peter Lang, 2017) was published and she is currently working on her second book about concealed visibilities and the politics of abstraction in the Middle East.

Maria Mileeva

Maria Mileeva is Associate Lecturer at The Courtauld Institute of Art, London. She is a specialist in 20th and 21st century art and visual culture of Russia and the former Soviet Union. Her research can be grouped into the following core areas: a comparative inquiry of leftist internationalists and fellow travellers’ involvement with the Soviet experiment in the interwar period; and the development of networks of socialist internationalism since 1945. The focus on transnational cultural interactions stems from her PhD (The Courtauld, 2011), which looked at the politics of exhibiting international art in the Soviet Union during the 1920s and 1930s. She is currently working on a research project that focuses on the practices of Soviet socialist realism and its reception in the former Soviet Republics, Middle East, Asia and Africa.

Zeigam Azizov

Born in 1963 in the Republic of Azerbaijan and currently living in London, UK. He is an artist and philosopher and his work addresses questions of time, image and techniques as well as narrative procedures of globalisation in relation to the languages of migrations, media, and the new mimesis. He exhibited his work worldwide, including most recently: the Venice Biennale (Azerbaijan Pavilion, 2019), The Time Salon (Sydney, 2017), the Venice Biennale (2011 and 2003), Tate Modern (London, 2006), House der Kunst, (Munich, Germany, 2004), Grazer Kunstverein (Graz, Austria, 2002), and TN Probe (Tokyo, 2001) among others. His recent book *The Time of the Image: A Philosophical Exploration of the Image in the Work of Bernard Stiegler* was published by Herbert von Halem Verlag in 2020.

DAY 2: Friday, December 4, 2020

18:00 - 18:05 (Tokyo) / 9:00 - 9:05 (London)

Opening Remarks

Sook-Kyung Lee

Sook-Kyung Lee is Senior Curator, International Art, Hyundai Tate Research Centre: Transnational, at Tate Modern. Lee previously headed Tate Research Centre: Asia-Pacific (2012-2015) and Asia (2016-2018) and led the research and acquisition of modern and contemporary art from Asia-Pacific for the Tate Collection. She recently curated the exhibition *Nam June Paik* (Tate Modern, 2019-2020) and is co-curating a collection display *A Year in Art: Australia 1992* (Tate Modern, 2021-2022).

Panel 3: Multiplicity of the Postcolonial

18:05 - 19:30 (Tokyo) / 9:05 - 10:30 (London)

Moderator:

Hayashi Michio

Professor, Sophia University, Faculty of Liberal Arts, art historian/critic based in Tokyo. Publications include *Natsuyuki Nakanishi* (Fergus McCaffrey Gallery, 2014), *Tadaaki Kuwayama* (Edition Axel Menges, 2014), *Tracing the Graphic in Postwar Japanese Art in Tokyo 1955-1970: A New Avant-Garde* (Museum of Modern Art, New York, 2012). Co-edited a volume of Japanese postwar art criticism, *From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989* (Museum of Modern Art, New York, 2012).

Speakers:

Ho Tzu Nyen

Ho Tzu Nyen makes films, videos and theatrical performances that are often related to historical and philosophical texts and artefacts. His recent works are populated by metamorphic figures such as the weretiger (*One or Several Tigers*, 2017) and the triple agent (*The Nameless*, 2015), under the rubric of an ongoing meta project *The Critical Dictionary of Southeast Asia* (2012-).

Yamamoto Hiroki

Born in Chiba, Japan in 1986, Yamamoto Hiroki graduated in Social Science at Hitotsubashi University, Tokyo in 2010 and completed his MA in Fine Art at Chelsea College of Arts (UAL), London in 2013. In 2018, Yamamoto received a PhD from the University of the Arts London. From 2013 until 2018, he worked at Research Centre for Transnational Art, Identity and Nation (TrAIN) as a postgraduate research fellow. After working at Asia Culture Center (ACC) in Gwangju, South Korea, he was a postdoctoral fellow at the School of Design, The Hong Kong Polytechnic University until 2019. He is currently Assistant Professor at Tokyo University of the Arts. His publication includes *The History of Contemporary Art: Euro-America, Japan, and Transnational* (Chuo Koron Sha, 2019).

Ma Jung-Yeon

Born in 1980, Seoul. She is Senior Assistant Professor at Meiji University and Visiting Scholar at Tama Art University, and Tokyo correspondent of *Wolganmisool*. Her recent publications include *A Critical History of Media Art in Japan* (Artes Publishing, 2014), *Paik-Abe Correspondence* (Nam June Paik Art Center, 2018), *Exhibition Spaces Emitting Light and Sound: Contemporary Art and Image Media* (University of Tokyo Press, 2019), and *Seiko Mikami: A Critical Reader* (NTT Publishing, 2019).

Odawara Nodoka

Born in Sendai City, Miyagi Prefecture in 1985. Lives in Tokyo. As an artist and critic, she conducts academic research, produces works of art, and writes criticism on topics such as the transition of the atomic bomb monument in Nagasaki, and the image of female nudity in public spaces. In addition, she is the representative of a publishing company, where she is involved in the publication of a collection of articles and series about sculpture.

Panel 4: Against the Neo-Colonial

20:00 - 21:30 (Tokyo) / 11:00 - 12:30 (London)

Moderator:

Ming Tiampo

Professor of Art History, and co-director of the Centre for Transnational Cultural Analysis at Carleton University. She is interested in transcultural models that provide new structures for understanding and reconfiguring the global. She is the author of *Gutai: Decentering Modernism* (University of Chicago Press, 2011), and co-curator of *Gutai: Splendid Playground* (Guggenheim Museum, New York, 2013).

Speakers:

Pamela Corey

Pamela Nguyen Corey researches and teaches modern and contemporary art history, with a focus on Southeast Asia within broader transnational Asian and global contexts. She received her BA (Studio Art) from the University of California, Irvine, and her PhD (History of Art and Visual Studies) from Cornell University, and is currently Lecturer in the History of Art and Archaeology department at SOAS University of London. She is the author of *The City in Time: Contemporary Art and Urban Form in Vietnam and Cambodia* (University of Washington Press, 2021), and her writing is featured in numerous academic journals, exhibition catalogues, and platforms for artistic and cultural commentary. Together with Wenny Teo she is guest co-editor of *Voice as Form*, a special issue of *Oxford Art Journal* (2020).

Ana Bilbao

Ana Bilbao is Lecturer in Modern and Contemporary Art at the University of York, UK. Her research explores extractivism through the lens of visual culture, histories of exhibition-making and art institutions, as well as contemporary art from the Global South, mainly from South East Asia and Latin America. Prior to joining York, she was editor of *Afterall Journal*, research fellow at Afterall Research Centre at Central Saint Martins, University of the Arts London, and teaching fellow at the University of Essex. In 2017 she was Visiting Scholar in the Art History Department at KU Leuven, Belgium.

Wenny Teo

Wenny Teo is an art historian and Lecturer in Modern and Contemporary Asian Art and Visual Culture at The Courtauld Institute of Art, University of London. She received a PhD in History of Art from University College London with a thesis that examined the ambivalent relationship between contemporary Chinese art and spectacle from 1978 to 2008. Her research centers on art, geopolitics, labor, technology, digital culture, ecology and gender in Sinophone cultures, and she is currently working on two book projects; one that focuses on contemporary Chinese art from 2008 to 2018, and a monograph on the Singapore-born British sculptor and printmaker Kim Lim (1936-1997). Prior to joining The Courtauld she worked at the Museum of Contemporary Art Shanghai and Tate Modern, and has continued to be involved in various independent curatorial projects. She is on the editorial boards of the *Journal of Contemporary Chinese Art* and *Oxford Art Journal*, and her writing has been published in numerous journals, exhibition catalogues and art magazines.

Fiona Amundsen

Fiona Amundsen is an artist and writer who has exhibited widely throughout the Asia Pacific region, United States and Europe. She is Senior Lecturer in the School of Art and Design (AUT University) and recently completed her PhD (Monash University) which explored alternative modalities for memorializing stories and experiences associated with the Asia-Pacific War (WWII). The exhibition that resulted from this research— *A Body that Lives* (St Paul St Gallery (Auckland 2018)— has been nominated for the 2020 Walters Prize, Aotearoa New Zealand's most prestigious art award. In 2019, she was awarded a Fulbright New Zealand Scholar Award which enabled her to begin the initial research for *Coming Back to Life* (2019 -), a photo-filmic-writing project that explores relationships between Cold War military nuclear technologies, military-capitalism, nuclear environmental destruction and spirituality.